

孝信様「北野社頭遊楽図屏風」に関する新たな検討

久野由香子(同志社大学大学院)

平成 26 年 4 月、興味深い作品が世に紹介された。『日本美術全集 第 12 巻 狩野派と遊楽図』所載の狩野孝信筆「北野社頭遊楽図屏風」である。六曲一隻、81.5cm×270.1cm という小さめの作品だが、描かれる人間たちが繰り広げる展開や筆致の細かさなど、なかなか見どころが絶えない。

まず右上方に北野社を大きく据える。『日本美術全集』の中で狩野博幸氏が指摘されているように、既に豊臣秀頼による改築後の姿を表しているから景観年代は慶長 12 年以降、更に孝信筆とすれば制作年代は慶長 12 年から元和 4 年の間と判る。そして本屏風の筆致の的確さは北野社社殿浮彫の描写において特に指摘できるだろう。秋草図屏風をたてまわしての宴会は見るも豪華である。北野経堂も大きく描かれ、その経堂の扁額には彩色までも施される点、さきの北野社社殿の描写の非常な細かさと併せて北野社改築と狩野派の関わりも推測できるだろう。

発表では、狩野氏の解説とは別に、新たに指摘すべき重要なことを述べてゆきたい。

まず本屏風の類品の存在である。『日本屏風絵集成』所載の六曲一双の屏風、さらに MOA 美術館所蔵の二曲一隻の屏風、この 2 作品に描かれている人間の姿態が部分的に本屏風のそれと共通する。これらは、描かれた人数が本屏風より大幅に少ないことからして本屏風の後に描かれたことは間違いないものの、時代はさほど下らないと考えられる。これらの屏風はどのような関係性にあるのだろうか。顔貌表現において孝信系の共通点があることから、これらを手懸りに孝信が風俗画において自ら展開した画業について明らかにする。

もう一点、画中に、盲目の僧が三味線を背負う様子が描かれている。平安頃から盲目僧は琵琶を持ち、特に琵琶法師と呼ばれてきた。琵琶法師は、当世を反映するものとして風俗画に欠かせない時世粧である。風俗画に関して時代を追い注意深く見てゆくと彼らは初め琵琶を背負っていたのが徐々に三味線に変わってゆくことが分かる。風俗画が時世を映す鏡であるならば、現実にはないことは描けないはずである。ここで、文献を見ると、例えば『色道大鏡』(延宝 8)には「平家にのせて琵琶をひくごとくに浄瑠璃にのせて三味線を引きはじめたるハ澤住がなすところ也」という記述がある。また『尤の草子』(寛永 9)にも「小うたにのせては、さみせんをひく。平家に合せてびわを引。」と書かれる。本屏風に琵琶でなくはっきりと三味線を描いた理由は何故か。三味線は慶長期一般に大流行することから、本屏風の制作はその流行の最初期にあたる。当時盲目僧達も三味線を持つことが最先端であったのである。即ち本屏風は、当時の風俗画というものがいかに時代の先進性を持ち、まして狩野派正系がこれだけ風俗に敏感な視線を持ち得ていたということの最初の証左になる。